特116
398

第二集

善の生命

始

特116
398

善の生命

（第二集）

千家元麿

大正
5. 6. 6
内交

目次

哀れな女（脚本）
犬の子（小品）
女乞食と犬の話（同）
或る斷片（感想）
六號記事

哀れな女

千家元麿

人物

島　豐（文士）（三十歳）
さわ（その妻）（二十四歳）
山形眞造（二十九歳）
かつ（その妻）（女工）（二十五歳）
とき（女の子）（六歳）
仙造（男の子）（四歳）
西田專太郎（眞造の友人）（三十歳）
老婆（專造の母）（七十歳）
はつ（女工）（かつの友）（二十三歳）

第一幕

舞臺　（山形眞造の家。むさ苦るしい長屋の一軒立。六疊と三疊の二間しか無い。三疊は玄關である。五燭燈がともつてゐる。六疊の間に長火鉢、茶棚等あり、蒲團が二つのべてあるので足の踏場もない。眞中の布團に六歳と四歳になる子が眠つてゐる。老婆は火鉢の前にボンヤリ座つて居る。裏の方で、モツトイ糸をつなぐ夜業の音が聞へる。）

とき。（目覺めて）おばあさん、もう何時

老婆。（びつくりして）何時、未だモツトイ屋で起きてゐるから十一時頃だらう、御前眠らなかつたのか。

とき。目が覺めたのよ。母あちやんは未だ歸ら無いの、今夜は遲いの。

老婆。遲いのだけれど、もう歸つて來るだらう。

とき。遲いのは仕事があるのだわ。私も早く大きくなつて母あちやんの工場へ出度いわ。然うして母あちやんを助け度い事よ。兼ちやんは八歳でせう、私だつてもう二年すると出られるのだわ、兼ちやんは兼ちやんの御母さんより御金をどつさりとるのだつていゝわね。二十錢とるのだつて。

老婆。早く大きくなつて御前も働く樣にならなくてはならないのだ。

とき。早く大きくなるといゝわ。御母さんも屹度喜ぶわ。時計が鳴つてゐる。島さんの時計ね。

老婆。私には聞へない。

とき。八つまで數へたがわからなくなつてしまつた。犬が鳴いてゐる。あれは、ちいちやんよ。

老婆。もう御眠みよ、仙ちやんが目を覺すから。

とき。眼が冴へちやつて眠られないわ。種々な事が胸に浮んで來て。

老婆。早く寢ないと母あちやんが歸つて來て叱られるよ。母あちやんを怒らせない樣にしなくてはいけないのだ。母あちやんは今機嫌が惡いのだから。

とき。どうして惡いのか私知つてゐるわ。御父さんが母あちやんの御金をもつて行つてしまつたのでしよう。御父さんは家へは一文も御金をもつて來ないの。どうして母あちやんは御父さんに御金をやるの、困つてゐるのにやるのね、御父さんは今度は默つてもつて行つたのでしよう。何處へ行つてゐるの。もう歸つて來ないの。

老婆。御父さんは今夜當りかへつて來るかも知れない。

とき。歸つて來る。

老婆。そうだよ。

とき。御父つさんは歸つて來ない方がいゝわ、きつと又酔拂つて來るのだから、何にも働かない癖に御酒を飲むのね、何處で飲んで來るのだらう。きつと洋服屋さ

んと一所ね、いつでも一所だから。二人で御金を使つてしまふのだわ、洋服屋さんは御父つさんに奢つてもらふのよ、どうしてあんな人が好きなのだらう、かあちやんは大嫌ひなのに、私も嫌ひだわ。此間來た時、島さんのちいちやんが吠へついたのであの人怒つたのよ、そうして御父さんに今度吠へたら叩き殺してしまつて遣ると云つたら、御父さんが、あの犬に石でもぶつけたら承知しないぞと怒つたわ。私聞いてゐて可笑しかつたから島さんの奥さんに云つたら、御父さんはいい方だと云つてよ。島さんの奥さんもあいつ嫌ひだと云つたわ。

老婆。御父さんだつてよくないけど、あいつがゐなければそうでも無いのだ。

とき。私母あちやんをいぢめる人大嫌ひだわ。母あちやんが可愛相だわ、あんな奴にいぢめられてゐるのだもの。御じいさんが居るといゝのね、おぢいさんがゐると怒られるものだからをとなしくしてゐるけど、御ぢいさんが歸つて來て欲しいわ。おじいさん御正月來る。

老婆。來るよ。

とき。御正月でなくては來ない。

老婆。御正月でなくては來られないのだよ。

とき。いそがしいのね、御正月になるといゝ衣服を仙ちやんと二人にもつて來てくれるの。

老婆。御ぢいさんは御前達に御正月になつたら何か買つて來て遣り度いのでかせぎに行つたのだから、きつともつて來てくれるだらう。

とき。嬉しいわ、もういくつ眠ると御正月。

老婆。未だだよ。

とき。未だ遠いの。

老婆。來月さ來月だよ。

とき。大晦日過ぎると御正月。

老婆。そうだよ。

とき。私嬉しいわ、嬉しいわ、又ちいちやんが啼いてゐる。誰か歸つて來たのよ。かあちやんだといゝ。

老婆。おこたはさめやしないか(立上つて布團の裾を見る)御前達すつかり母あちやんの寢卷を落して冷やしてしまつた。こうしてをいで遣らないと母あちやんは凍へ切つて來るから可愛相だ。眠てをいで叱られるから。

とき。かあちやんだ。ちいちやんか止んだもの、下駄の音がする。

(表に足音が此家の方へ來る。蟾て戸を開く音がする。月の光りが薄く家の内にさし込む。)

老婆。かつかい。

かつ。えゝ。(戸締りをする音)

（かつ入り來る、二十四歳だけれど、過激の勞働と苦勞は此の女をずつと年より老けて見させる。髮は櫛卷手も顏も工場で使ふ藥品の爲めに腫れて居る。この寒中に木綿の單衣にそれも矢張り藥品の爲めに色が變つたりずたゞに切れたりした上つばりな何枚も何枚も重れて着て僅かに暖をとつてゐる。辨當包みを持つ）

かつ。未だ歸つて來ない、おばあさん。

老婆。未だ歸つて來ないよ。御前寒かつたらう。

かつ。あゝ。

老婆。今夜は別して冷える樣だから。外はひどい霜だらう。

かつ。足駄では歩きにくい位下りてよ。おばあさん、私これから一寸行つて來る、わ。

あの人を探して來ようと思ふ。きつとあの女の處に居るだらうと思ふから、今行けば未だ御金も持つてゐるかもしれないから、行つてとつて來ようと思ふの。

老婆。いゝえもう持つてはゐないだらうよ、使つてしまつてゐるとも、持してをきはしなからう。止めた方がいゝよ。行つても會はせはしないから、耻を搔きに行く樣なものだから、この寒いのに行つて風邪でも引いては馬鹿々々しい。行けば電車だつてなくなるだらう、止めた方がいゝ。此方からは放つて置く事にをしよ。

（かつ火鉢の側に座る。老婆もその側に座る）

老婆。それより工場の旦那の方の工合はどうなつた。

かつ。旦那は矢張り今度だけは大目に見て下さるて。

老婆。旦那が許して下さたのかい、あゝ、それで安心した。それはよかつたね。あの人は幸した。これも皆んな御前のをかげだ。あの人でも未だ牢屋へ入るのは可愛相だ。未だ年も若いのだから、どうでもなる體だから。（涙を拭く）

かつ。私は御上みに訴へて下さいといくら賴んだかしれない。その方がいゝのだものゝどうせあの人は後悔する筈はないから、こんな時でも酷い目に合ふ方がいゝと思ふわ。自分でこんな事をしたのだから、丁度いゝのだ。

老婆。ときや仙坊の御父さんだと思へばそんな處へは入れられないよ。御前は今氣が立つて居るからそう云ふけれどなか〳〵如何うしてそんな風に行くものではない。

かつ。今も餘程交番へ行つて巡査に願つて來樣と思つたわ。私だつて心配だもの、此上何をさせるかしれないもの。それに私だつて此儘にしてをくのは餘り馬鹿にされ過ぎる。工場を止められでもしたら如何うしようと思つてゐるのだらうね。工場にまで迷惑をかけて私を苦るしめなくてもいゝと思ふ。旦那にあんな事をすれば私が困るのは目に見えて居るのに、皆んな私を苦るしめ樣としてゐるのだわ。私なんかどうなつてもいゝと思つてゐる遣り方だもの。ひどい人だね本當に。未だこれでも苦るしめ足りないのかしら。何處までひどい目に會はせる量見だらう。屹度あの女が指圖してゐるにちがいない。あの洋服屋の奴も共謀なの

だよ。三人で苦るしめるのだ。あいつは先から私をあの人と別れさせ様として居たのだから、どうかして私にしくじらせようとしてゐるのだ。あいつは此頃あの女の處に世話になつて居て行き處がないと云ふから、慥かにあいつも共謀の仕事よ。女ばかりだと思つて爲てゐるのだよ。私は御ばあさん、工場にゐてもね。手から足から、胴からぶる〳〵ふるへ通しよ。それも一昨日からつゞけて。

老婆。口惜しいだらうが我慢をしてをくれ。女は仕方が無い。軀でも惡くしたら取り返へしがつかない。今御前に惡くなられたら皆んな困るのだから、そんな事で氣を詰めないでをくれ。一番軀に障るからね。御前がたつしやで居てくれなくては何にもならないよ、御父さんなんかどうなつても構はないが、旦那が許して下さつたのならそれでもういゝとして氣をもまない樣にしてをくれ。出來てしまつた事は仕方が無い。ね、あんな人はする樣にさせてをくさ。今に目が覺める時もあらうよ。

かつ。とても目なんか覺める人ではない事よ。まるで蛇のように執念深いのだから、あゝ私を此上苦しめるのには私が死ぬよりありはしない。私が寢てしまつたらどうするだらう。私だつて小供さへなければとつくに死んでゐる軀だ。じりじりこんな目に苦しめる位ならいつそ一思に殺してゞもくれるがいゝと思ふよ。

老婆。そう云ふものではない。云つても甲斐のない事だから云はぬ方がいゝ。我慢、

我慢。それが一番だよ。私がもつと若かつたら少しは助になるだらうが、何にしろ此年では仕方がない。御前に變つてあの人にも意見もしてやり度いが、いや〳〵私が云つた所で仕方がない。私の代はもう過ぎたどつちからも憎まれたくはないと思つてゐる。

かつ。私も御ばあさんに働いて貰はふとは思はない。只私はどうなるかと思つて、これでは全くやり切れなへものの。

老婆。助になる可き人があれではね。

かつ。まるで私達はどうならふとかまわないと云ふ遣り方だもの。私もね、今度はすつかり量見をつけようと思ふ。工場の旦那も別れた方がいゝと云つて下さるから、そうしようと思ふの。

老婆。御父さんだつて今御前に別れられたら直ぐ困るだらうからよく話して見たらきつと如何うとか爲るだらうよ。氣の弱ひ人だからいざとなれば考へるにちがいないよ。小供も二人もあるのだし、分らない人ではないのだから、氣の持ち樣一つで如何うにでもなれる人なのだから。

かつ。あんな人ともう〳〵一所にはなり度くはない。あんな人にいつまで當てにされてゐてはたまらないもの、

老婆。それもそうだ。だがあの人はそう惡い人ではないよ。親切氣もあり根は優し

い人なのだから、只あの友達はいけない、あれはなか〳〵惡黨だ。あの顔からして惡黨だよ。私は御父さんがあの人を家へ連れて來た時からあゝこの人は餘り親切のある人ではないと思つてゐた。何も他人の女房の事なんかどうでもいゝではないか、それを誘ひ出すなんてよつぽどよくない人でなくては出來ない事だ。

かつ。どうしたらいゝのかね。むしやくしやしてしまふ。法がつかないね。

老婆。（立上る）ゆつくり考へるがいゝ。何もいそぐ事はないから。こうまでなつてゐるのだから別れると云つてもなか〳〵むづかしいものだよ。御前寢卷とかへて床へ入つたらいゝだらう。おこたがしてあるから暖いよ。あゝそれから御腹が減つてゐるだらう。島さんからうどんのたまを頂いたのがとつてあるから暖めて御上り。

かつ。私はいらない。島さんでは旦那は未だ起きてゐらつしやるようだつた。

老婆。あの方はいつも夜勉強なさるので遲いのだ。御前食べるといゝ。私はときや仙坊と一所に御馳走になつて來たのだから、奥さんが母あちやんにと云つて下さつたのだから。

（表に足音がする）

女の聲。かつちやん、未だ起きて居て。

かつ。はあちやん。

はつの聲。えゝ。

かつ。上つて頂戴、今明けるから。（立上つて行く。戸を開く音）

はつの聲。旦那は歸つて。

かつの聲。未だ歸らないの、まあ、上つて頂戴。

はつ。ありがとう私はいそぐのだけど。

（二人六疊の方へ來る。初は勝と同じ工場に出てゐる女工。かりよつ若い）

はつ。おばあさん今晩は、未だ起きてゐらつしやつたの。一寸御湯へ行つて來たので通りがゝつたから寄つて見たの、さつき餘りかつちやんが心配そうな顔をしてゐたからどうかと思つて。

かつ。ありがとう。

老婆。はあちやんにうどんを上げよう。

かつ。あゝ。

老婆。然うして御前も一所に食べるといゝ。

はつ。おばあさん、私はいゝのですよ、御構ひなく、すぐ御暇しますから。

（老婆は臺所へ行つて鍋をもつて來て、うどんを入れて火鉢にかける）

はつ。皆んなよく眠てゐるのね。

かつ。えゝ、御ばあさん先きへ眠るといゝ。私達でするから。

老婆。そうかい、では暖つたら御あがり、私は先へ御免しよう。（隅にのべてある布團に入る）

はつ。未だ歸らないの、心配だらうね。

かつ。えゝ、私ね、餘り口惜しいからこれからあの人の處へ押して行つてやらうかと思つて居たの。

はつ。先はわかつてゐるの。

かつ。大概、いつもゆく女の所だらうと思ふの、そらいつか私が話したでせう、押して行つてやつた事がある。

はつ。未だあの女と切れてゐないの。

かつ。えゝ。

はつ。困るね。かあちやんもよく〳〵運が惡いのだわ、だが無茶の事はしない方がよくつてよ。私はかあちやんが軀をこわしはしないかと思つて心配でならないわ、工場を休むようになつたら困るもの。本當に大事にして頂戴ね。もう旦那の方もすんだのだから大概の事なら氣にしないで、軀を休めた方がいゝわ。

かつ。ありがとう。私もあきらめ樣と思ふけど餘り思ひ出すと腹が立つてね。それに未だ御金も使ひ切つてゐない氣がするものだから、行つてとつて來てやらうと思つたの、そうすれば旦那に御かへし出來るから。どうせ使ひ切らなくてはかへらないと思ふから、未だ歸つて來ない所を見るともつてゐやしないかと思ふ

の。持つてゐればね、少しでも旦那にとつて御返し出來ればいゝからね。

はつ。旦那の方は心配しないでもいゝではないの、旦那だつてもう何ともあゝ云つた以上は思つてはいないわ。きつと、一體いくらなの、十圓でせう。

かつ。えゝ十圓。

はつ。その十圓がこつちにあつたらどんなにいゝかしれないのにね。もう使つてしまつて居てよ。そう云ふ御金は自暴が手傳ふので馬鹿々々しく使つてしまふと云ふから、殘してをけないのね。自分でも氣持が惡いのだわ。

かつ。その位ならどうして使ふ氣なんかになるのでしよう。人の氣も知らないで、自分が縛られても仕方が無いのもわかり相なものではなくて。恐いとは思はないのかしら。

はつ。矢張り恐いでせう。旦那は未だこつちの樣子はまるで知らないの。

かつ。えゝ知りつこないわ。

はつ。では恐いわ。

かつ。それで家へも寄りつけないのかしら。そうかも知れない。それもどうだか、あんな人の事だから旦那が許して下さる位に思つてたかをくゝつてゐるかもしれない。蟲がいゝのだから、人の迷惑なんか平氣なのだから。

はつ。まさかそんなでもないでせう。

かつ。わからなくつてよ。それともどつかで御金の算段でもして來る氣か、そんな人ではない。そんな氣があつたつて何處でだつて借してくれる樣な處もないから、今度は困つてゐるよ。一人で苦しむがいゝのね。自暴自棄だから。だが矢張りこつちの思ふ程に困つてもゐないのだよ。

はつ。こつちの方が餘程心配ね。

かつ。本當に馬鹿だ。歸るにも歸れやしない。

はつ。御金を使つてしまへば目が覺めるからねどうして旦那も御金なんか渡す氣になつたのでしよう。こんな事初めてゃしよう。

かつ。えゝ初めて、初めてゃすぐこれだから呆れてしまふ。旦那はあの人を信用して下さつて賴んだのね。それを白を切つて受け合つて行つてこんな事をしたの。出來ない事でせう。どう考へたつて旦那にこんな事が出來る義理ではないのだもの、本當なら自分を信用して下さつたのを有難く思つていゝ筈なのだらう。始終私が御世話になつてゐるのだから、こんな時にでも喜んで用を足して上げてくれゝばいゝのに。

はつ。そうすればあなただつて嬉しいものね。旦那に對しても。

かつ。そうよ。それをまるであべこべな事をしてしまつてくれたのでしよう。

はつ。どう云ふ筋の御金なの、私よく聞かなかつたけど。

かつ。ごむを買つてくれと旦那が賴んだの。家の人が先の工場をしてゐた時分安く買へる所を知つてゐたので、それだものだから旦那の方から賴んだらしいの。旦那が私を呼んで御金を十圓渡してごむを買つて來てもらふように賴んだけど、未だに歸つて來ないと云はれた時、私はどきつとした。

はつ。まるでかつちやんの知らない內なのね。それを賴んだのは。

かつ。そうなの、私何も知らないのでしよう。だから驚いてしまつたの。私が初めから知つてゐれば家の人に賴むのは止めて下さいととめたわ、きつと。そうなればこんな事にならなかつたのだけど、間が惡く私がそれを知らない內に旦那と家の人と會つたのだわ。それでね。私もまさかその御金をもつて行つて仕舞ふとは思はないから、未だ旦那もその時は私と同じにそんな事はあるまいと思つてゐるらしかつたので私は二階へ來て仕事をやつてゐたわ。だが氣になつて氣になつてたまらないの、それで家へ行つて見たら樣子がわかりはしないかと思つて、こつそり家へ來て見て、おばあさんに家の人は來なかつたと聞くと、今二時間計り前來て御ばあさんに五十錢くれて行つたと云ふの。私はすぐ大變だと思つたあの人がそんな御金をもつてゐる筈はないのだから、おばあさんその五十錢は大變な御金だよ。と云ふて譯を話すと、そう云へば何だか樣子が變だつたと云ふの、それから私は工場へ來るまでは無我無中、それから工場へ來たが、どう云つて

旦那に話したらと思つて、その邊をまご〳〵ぶらついてゐたが、仕様がないしその内口惜しいのと恐ろしいので涙がポロ〳〵こぼれて來る。それから旦那の所へ行つて、私の考へてゐる事は皆んに云つてしまつた。慥かに持つて行つて使つてしまふにちがいありませんから、すぐ警察へ御訴へ下さいと願つたの、私はまるで氣違ひのようだつた。

はつ。旦那はどうして。

かつ。そうしたら旦那は、未だ使つてしまふか持つて來るかわからないから夕方まで待つて見ようと仰有るの、それから私は待つたつてとても持つて來やしません。それより今の内訴へて下されば御金もかいるかもしれませんと云つたの、それでも旦那は私にまかせてをしまいと仰有るの。それから夕方まで、私は仕事してゐても、軀中ふるへ通し、その上口惜しくて情け無くて泣き通し。よく悚へたと、思ふ位。その時よ、はつちやんが私の側へ來て云つてくれたのわ。だがあの時はまるで何もわからなかつたわ。そうしたら私の思ふ通り夕方にも來ない。旦那はそれでも明日まで待とうと仰有るの、これはてつきり私まで疑はれてゐるのだと思つて私はもうどうしようかと思つた。本當にその時は私は死のうと思つた。

はつ。ひどい目に會つたわね。それで旦那は十圓損した位の事ですんだの。別に御給料から差しひくような事はしないのでしよう。

かつ。私もそう願つたわ。そうしたらそんな事したら食べられなくなるではないかと云つて矢張りとり上げて下さらないの。私はね、いつか其内には蓄めてでも御返ししなくては餘りすまないと思つてゐる。

はつ。矢張りかつちやんに工場の方を取締つて貰はないと困るから旦那も遠慮して居るのだわ。それに旦那同士でも古い知り合ひなのだから。餘り氣にしない方がいゝのだけど。

かつ。餘り申譯がないもの。

はつ。旦那はよくあなたの氣性を知つてゐるから察してゐるよ。

かつ。でも尙すまないと思ふもの。餘り親切にして下さると思つて居るのに、それをあんな事をしたのだから本當に恐い氣がする。外を歩いてゐてもびく〳〵して厭だわ。

はつ。あなたが爲た事ではないのだからそんなにまでびく〳〵する程氣にしなくてもいゝわ、もつと呑氣にしなくては生甲斐がないわ。

かつ。始終身なりが汚無いだけでも表を歩くのにだつてびく〳〵してゐる處へ今度の事があるのだからまるで表なんか歩いてゐても夢中よ。人から何と、か思はれやしないかと思つて、どつかで指をさゝれてやしないかと思つて下を向いて歩いてゐる事よ。

はつ。罪だわ。いゝ加減ひけ目になつて居る者を如何うにも出來ない程不幸にするなんて。あなたの苦るしみを聞いて居るとまるで呪はれてゝも居る樣に思へる。どこまで不幸なのだらう。何處まで不幸がかゝつて來るのだらう。如何うしても別れた方がいゝ事よ。

かつ。私も今度こそは、然うしようと思ふ。旦那もそう云つて下さるから、然う出來ればいゝのだが、別れるにしても法がつかないのですもの。はあちやんは早く判れたのでよかつたのだわね。

はつ。私だつていつまで愚圖々々して居たから今頃はきつともつと酷い目に會つて居たらうと思ふわ。

かつ。思ひ切つて早く別れてよかつたのね。私は未練なんかないけど先の事を考へると心細くなつてしまつて勇氣が出ない。

はつ。それも小供があるからだわ。小供を抱へて居ると女は如何うしていゝかわからなく無るのだわ。

かつ。自分だけなら私だつて平氣だけど、ちいさいのを二人も抱へてゐては遣れないもの。私の軀がうまく續いて呉れゝばだけど、いつ寢ないとも限ら無いもの、おばあさんだつて今は私が工場へ行つて居る留守は小供の守をして居てくれるから助るけど、おばあさんでも居なくなつたら如何うしようと始終思ふの、あ

の人だつていつどんな事があるかも知れないでせう。御葬ひの御金や御墓を買ふ御金もつくつてをかなければいざと云ふ時すぐ困るでせう、それに一錢の貯金も無いのですもの。先の事を考へると餘り頼りがなさ過ぎるので氣が變になつてしまふ樣よ。別れるならいつそ仙坊だけは御父さんの方の籍へ入つてゐるのだから渡してしまつて別れ樣かとも思ふの、そうすればどうせ自分では養へないから、姉さんの方へ遣るでせうと思ふの。

はつ。折角今迄育てゝ來たものを放すのは惜しいわ、ずい分かあちやんだつてつらいわ、仙ちやんだつて可愛相だわ、旦那は小供が可愛ゆくはないのでせうか。

かつ。小供の事なんか思ふものですか。自分では小供が可愛ゆいから家へ歸つて來ると云ふけど、私はあの人がついぞ一度でも小供に優しい言葉をかけたのも何か買つて來て遣つたことも見た事が無い。ときなんかまるで御父さんを馬鹿にして、御父さんは嫌ひだよと平氣で目の前で云ふから、向ふでも腹の底から嫌ひらしい風をするの、仙坊だけは自分の籍に入つてゐる性かときより可愛がるけど、その場切りで深い情なんかまるでないの。家にゐたつて何にも成りはしないの。

はつ。小供を可愛がつてくれないのが一番不可ないのだわ。

かつ。そうよ。

はつ。小供に優しくしてくれゝば矢張り女親は嬉しい、他人にほめられても嬉しいのだもの、それが可愛がつてくれでもしなければこんな淋みしい事はないわ、それだけだつて大概はこぢらされてしまふわね。

かつ。小供にもかまわず、私にも御ばあさんにも誰にもかまつてくれないのだからまるで家の人の様ではありはしない。それでも家にゐれば大きな顔をしてゐるのでしよ。私の嫌ひな友達なんか連れて來て、影でこそ〳〵話してゐる、何だと思へば何處かの女の話なのだから憎らしくなる。

はつ。旦那が工場へ出ればいゝのね。

かつ。職工なんかと一口に云つてしまふの。

はつ。でもかあちやんの苦るしみを少しは察してゐるでせう。すぐ側にゐてまるで忘れてゞもゐるようにしてゐる人つてあるでせうか。

かつ。私は馴れてしまつて初めからそうなので不思議にも思はなくなつてしまつたけどあの人は一度でもそんな事考へてくれた事はない。

はつ。他から見ると優しいいゝ人らしいけれどね。

かつ。今迄だつて大概苦るしい處へは私が變つて出てゐるのですよ。いつかも工場の荷を送る時手紙を入れてやつたのでそれがめつかつて警察へ呼ばれた時だつて、自分では恐くて行けないの變りに私が行つて、亭主が知つてゐてやつた

のだらうと云はれたが、そうではありません、私が知らずにしたのですつてとう とう我ん張つて通つたけど、何でも自分が苦になる事はいやなのずるいのよ。

はつ。そうして始終遊んで居るのね。

かつ。おばあさんから電車賃をもらつては行くの、電車賃だつてなか〳〵だわ。だから家にゐて小供の守でもしてくれゝば、私も氣が強いから一生懸命働くと云ふのにそれも出來ないの。

はつ。もう旦那が何もしなくなつてから どの位になるの。

かつ。五六年になつてよ。

はつ。其間づうとかつちやん一人で遣つて來たのね、本當にかつちやんの辛抱強いのは感心してしまふ。

かつ。遣つてくるにも來ないにも、今では私に仕事があるからいゝのだけど、工場へ出ない前なんか、私は毎日仙坊ををんぶして町をほつつき歩いて居た。食べるものがまるでないのですもの。昨日一升買つたと思ふともう明日は何にも無いのでしよ。それでおばあさんとときと仙坊と私が食べて行かなくてはならないのだ。私まるで其の時分は今思つても氣が違つて居たと思ふ。私は幾度仙坊と一所に死のうと思つたか知れない。橋の上へ行つては仙坊を抱いて下へ落そうと幾度したか知れない。そのたんびにおばあさんやときや仙坊が可愛相だと思つ

てどうしても思ひ切れないの。私はあの時いつそ死ねたら尙樂だらうと思つたわ。おばあさんやときは私が居なければ明日からでもすぐ困るのだから。私がそんな風なのにどうでしよう、あの人は工場を止めたあとにあの洋服屋と女をひきづり込んで毎日自暴半分の御酒盛をしてゐる。私達は裏店でヒイ〳〵してゐる。洋傘でも何でもあるものは十錢とか五錢とかで御金にかへてはやつと御芋を食べて行くのでしよう、そうして、あゝ今日はまあよかつたと思ふ。一日一日そうして行くのだらう。それで先にあてはまるで無いのだ。まつくらなのだ。こんな事もあつたは、御芋屋の前を通つて見てその日は朝から何も食べないの。あゝ一錢あつてくれたらと思つた。ぱつちやんだからこんな事を話せるけど、本當にあの頃の私は乞食も同然だつた、あゝあの頃の事を思ふと恐ろしくなる。よく生きて來られたと思ふ。私はあんな苦勞は二度と會ひ度くないものと思ふ。如何うして私はこんなに運が惡いのでしよう。何にも惡い事もしないのにと思ふけど、矢張り惡い處があるのかしら、何處か惡いのか知り度くなる。欲はない積りだがこうなつても未だ欲があるのでしようか。

はつ。かつちやん位欲の無い人もすくないと思ふわ。欲がある處かなさ過ぎるのだわ、それでこんなに苦るしいのではやり切れないわ、外の人なら何か買ひ度とかどうかしたいとか欲で苦るしむ人は未だ我慢のしようもあるけど、かつちやん

はまるでそうでないのだもの。苦るしまなくてもいゝ事に苦るしまなくてはならないのだもの、こんな辛い事はありはしない。私は本當に貰ひ泣きする。ひど過ぎる。皆んなもつて生れた氣性によるのだらうが、それにしても餘りひどい。慥かに運がよくないのだ。それは運直しにどうしても別れるがいゝわ。そうなさい。私はすゝめるわ。家へ一所になりましよう。そうして御互に助け合つて行けば如何うとかなるわ。私ももう男はこり〳〵だから、姉妹の樣にして助け合つて行こう、そうすれば如何うとかなると思ふわ、考へ無いであきらめて仕舞ふ方がいいわ。こうして人に耻づかしくない樣に地道に働いて小供を育てゝ行けば、私はそう思つてゐるわ、どうとかなると思つて慰めるより無いもの、どうせ成る樣にしかならないのだもの、かあちやんなんか自分の事はこれつぽつちでも欲がある のではないもの、その上に苦るしいのだもの。だけど女は一人では心細いからね、私達は離れつこないと思つて遣つて行こう、そうして行けば暮しだけなら兎も角樂なのですものね。

かつ。仕事だつてそう苦にはならないし、あすこは務めいゝから助かるけど。

はつ。外の工場はひどいんですつてね。仕事が競爭だものだから、まるで女工達は喧嘩で仕事を奪ひ合ふのですつて、氣の弱い人では仕事がまるでとれない時があると云ふもの、それでゐて一番澤山とる人で一日に十二三錢だよ、そんな所へ

入つたらたまらないわ。かあちやんはあすこの工場なら、旦那が先からの縁で目をかけてくれるから樂だわ。

かつ。働きよりは賃銀も餘計下さるのだからね。

はつ。その方がいゝわ。男があゝなつたらよくなりつこない事よ。誰だつてよもやに引かれるけど、それも此方の自惚れかも知れないもの。

かつ。こんなになつても自惚れがあるのでしようか。そうしようかしら。

はつ。そうすれば樂だわ。あなたなんか餘りひどすぎると思ふわ、衣服だつてそれ切りか無いのでしよ。

かつ。衣物なんかないわ。

はつ。いくら働いたつて衣服一枚自分の身にはつけられないなんて。かつちやんは本當にひどすぎるわ。餘り欲がなさすぎると私始終思つてゐる。

かつ。只私は先きの事を考へると意氣地がなくなつてしまふのですもの。

はつ。その内にはときちやんだつて助けになつて來ますわ。

（沈默。遠くで犬が吠へたり、汽笛が鳴つたりする）

かつ。はつちやんは別れてから先の人に會つた事があるの。

はつ。一度も無い。もう別れて仕舞へば男なんか誰だつてふり向いても見やしない。

かつ。別れても目が覺めないのでしようか。

はつ。向ふが、男がでしよう、覺めるものですか、中には然う云ふ人もあるでしようが、大概は駄目らしい、私のなんか無論駄目だつた。又こつちでも目が覺めて貰ひたくもなかつたけど。

（近所の湯屋の終に流す音や桶を積み重れる音が四邊に響いて聞へる）

はつ。もう御湯で流して居る。遲くなつてしまつた。私は歸らう。

かつ。いろ〳〵ありがとう。

はつ。よく考へる方がいゝわ。明日又工場で相談しましよう。御ばあさんはよく眠てしまつた。

（二人入口の方へ出る）

はつの聲。さよなら。

かつ。有難ふ、さよなら。

（かつ室へ歸り來る。下駄の音遠ざかる。かつ寐卷に着かへる。寐卷と云つても洗ひ晒らした白地の單衣である。炬燵を出して老婆の布團へ入れてやる。然うして小供等と一つの布團へ入る。四邊が靜かになる。風が少し吹き出す。）

かつ。眠られ無い。又眠られないのか、あゝ肩が痛い。

（一家眠りに沈む。暫らくして犬の聲けたゝましくする。やがて足音が此家の前にとまる。戸を明けようとする音がする。）

聲。をばあさん、おばあさん。

（幾度もよぶ）

老婆。（やつと目が覺めて）誰か私をよんでゐる。

聲。俺だよ、おばあさん。

老婆。そうか。（立上る。玄關へ出て行く、戸を開く音。）

かつ。（目を覺す）おばあさんか。

老婆。私だよ。

かつ。（強く）おばあさん、歸つて來たのではない。

老婆の聲。待つてをくれ、今明けるよ。

かつ。（飛び起きる）歸つて來た。

（眞造入り來る。銘仙の着物に紺色のセル地らしい羽織を着た少しニヤケタ男。かつ。その前に立つ。）

かつ。御金はどうした。もつて行つただけもつて來たかい。十圓かい。十圓なくては駄目だよ。早く御見せ。

眞造。今話すよ。

かつ。財布を見せて、何處にもつてゐる。

眞造。財布は懷だけれど（財布を出す、かつひつたくる）中はありはしないよ。

（かつ財布を改める。名刺その他の紙屑のみである。）

かつ。無いよ。何にも無いではないか、これ切りなの、御金は無いよ、御金は何處にあ

るのだか、早く御出し、隱して居るのだらう、何處にかくしてゐる。

眞造。何處にも隱してなんか居ない。

かつ。嘘だらう、本當かい、本當に皆使つてしまつたのか、一錢殘らずに使つてしまつたかくして居るのだらう。袂にはないかい、だつた二日でそんなに使つて仕舞つたのかい。半分位殘して置き相なものだ。殘してあるのだらう出してをくれ、半分でもいゝから、半分でも助るよ。

眞造。半分もありはしない。

かつ。半分もないすつかりないの、皆使つてしまつたのあゝ呆れた。本當十圓を皆んな、あゝそれで歸つて來たのか。皆使つてしまつて、何處で使つたのだい。あの女の處だらう。え、あいつの處だらう。西田も一所だらう。一人ではないだらう。二人で使つたのだらう。どうして使つたのだい。あゝ皆んな使つてしまつたあいつの處で、とつてをいで、とつて來てをくれ。借へしてもらつて來い。譯は云つてないのだらう。譯を云へばいゝ。借へしてよこすだらう。

眞造。そんな事出來るものか。

かつ。出來ない、借へさないと云ふのかい。そんならどうするのだ。それですむかい。

何故もつて早く使つてしまわない內に歸らなかつたのだ。

眞造。俺も歸らうと思つたけど。

かつ。歸らうと思つたら、何故歸つて來なかつたい。その時歸つて來れば未だ何でもなくすんだかもしれないだがもう遲い。あゝ（狂氣の如く眠つて居る仙造を起す）仙造、起きるのだよ。起きるのだよ。

眞造。折角眠つて居るものを起さなくてもいゝぢやないか。

かつ。この子を連れて出て行つておくれ。家にはどろ坊はをけないから、着物と羽織はぬいで行くのだ。家で造つたのだから單衣物だけは遣るからをんぶして連れて行け。今直ぐだ。早く、私の方はときとおばあさんと食べさして行くから、仙坊だけはそつちで養ふがいゝ。

眞造。出しぬけにそんな事云つたつて困つてしまふ。

かつ。男の癖に仙坊一人連れて行けない事があるものか。この子は私の子ではないのだ。仙坊はかあちやんの子ではないから御父ちやんと行くのだ。

（仙造を眞造の方へ突き遣る。仙造行くまいとして倒れて泣き出す。）

老婆。ゐい。そんな事して、仙坊はこつへ御いで（仙造をかばふ）仙坊に何も罪はありはしない。

かつ。ほつてをくがいゝ。連れて行かせるのだから。

眞造。俺だつて困る。

かつ。いくら困つたつてどうとかならない事があるものか、こつちの事を思へば

一人位何でもない。默つて連れて行くがいゝ。

老婆。そんなに云つては御父さんも困るだらう。御父さんもよくない事をしたのだから今度は謝つたらいゝだらう。

かつ。御ばあさんは默つてゐるがいゝよ、どろ坊を家へをいては旦那にすまないよ。

老婆。けれど旦那も許して下さつたのだから、今度だけは御前も勘辨して御やり。旦那も何とも仰有るまい。

かつ。旦那が勘辨したつて私は勘忍出來ない。それでは餘り申譯がなくなる。

眞造。俺だつて旦那に詫りに行く。御前より俺の方が旦那はよく知つておるのだから。御前があすこへ入つたのだつて俺の御かげではないか。俺が旦那を知つてゐたので入れたのだ。

かつ。そんな事で恩を衣せるなら私は今迄御前が養はなければならない妻子や御ばあさんを養つて來たよ。私があすこへ出なかつたら御前さんは私達をひ干しにしてしまつたらう。

老婆。そんな事云ひ合つても仕樣が無い。今度は御父さんが惡いのだ。何と云つてもそれはいけない。惡い事してゐてそんな事云ふ法はない。御かつにだつてどの位迷惑をかけたかしれやしない。

かつ。こいつは私の事なんか考へてくれやしない。何と云ふ奴だらう、鬼だ。鬼、鬼。出て行け。

（眞造に挑みかゝる。）

さこれをぬげ。（羽織ぬかせようとする。）

とき。かあちやん、御止めよ、かあちやん。

（母を引留め様とする。かつときを突き遣る。とき泣き出す。）

かつ。泣け、泣け、皆んなで泣け、こいつが私達を殺すのだ。（泣き叫んで打つてかゝる。）

眞造。離せ馬鹿。こうして遣る、（かつを取つて伏せる。その上に馬乘りになる。）俺が惡かつた。俺は話しをしようと思つてかへつて來たのだ、氣をしづめてくれ。

かつ。（組み伏せられ乍ら）出て行け。おばあさん、巡査をよんで來てをくれ。（老婆いそいで姿をかくす。）

仙造。（老婆が居なくなると泣き叫んで父に打つてかゝる）かあちやんが殺される。かあちやんがとつちやんに殺される。

とき。御父さん許してやつてをくれ、かあちやんが可愛相だ。可愛相だよ、御父ちやん。

眞造。向ふへ行け、俺はかあちやんをいぢめやしないよ。

かつ。皆んな殺してむらへ、此處へ來て、殺してむらへ。嬲殺しにしないで一思に皆

んなを殺せ。

眞造。あゝ氣をしづめてくれろよ。馬鹿な事云ふな。殺すのなんのつて。只御前があばれるから抑へて居るのだ。靜かに話したつてわかるから。あばれなければ放すよ。

かつ。出て行け。出て行け。

（島の妻さわ驅け入る）

とき。（その姿を見て）かあちやんおばさんが來てよ。

仙造。（夢中で泣き叫ぶ）かあちやんが死んだ。かあちやんが死んだ。

（眞造さわに氣かついてかつより離れ、火鉢の側へ行く。かつ伏したまゝ起きず。さわ側へ寄る。）

さわ。どうなさつて、おかみさん、ときちやん水をもつて來て下さい。

仙造。（泣きつゞける。）かあちやんが死んだ。かあちやんが死んだ。

さわ。仙ちやん、かあちやんは死んだのではないのよ。御かみさん仙ちやんが心配してゐるから返事をして上げて頂戴。あんなに泣き苦るしんで居ますから。御かみさん。返事をして上げて下さい。

老婆。仙坊、泣くぢや無い、かあちやんはきいきが惡いのだから。

仙造。死んだのだ。かあちやんが死んだ。かあちやん、かあちやん。

（母の伏してゐる顔を見ようとして遂に顔をすりつけて夢中でその顔をさぐらうとする。とき水を茶碗にもつて來る。さわ

受とりかつの枕元に置く。）

さわ。御かみさん。水を御飲みなさい。あゝあんなにして仙ちやんがあなたの顔を見たがつてゐます。本當に御死にゝなつたと思つて心配してゐるのです、たつた一言でも云つて下されば安心します。

老婆。顔を見たがつて居るのだ。これを見てはいくら鬼の樣な人でも泣かないでは居られない。

さわ。小供に罪はないのです、御かみさん。

老婆。奥さんが云つて下さるのだよ。仙坊を安心させてをやり。

（仙造泣き悶へて吐瀉す。）

とき。仙ちやんが吐いた。（泣き出す）

老婆。あゝ、あゝ吐いてしまつた。可愛相に、苦るしい事だらう。とき雑巾をもつて來てをくれ、濡らしてだよ、（とき走り行く）あれ、あれ、これは如何うした事だらう。こんな小さな小供が吐くなんて。奥さん、恐い事ですね。こんな小さな小供が。

さわ。吐いたのですか。

老婆。泣き悶へたのです。こんな小さい子にこんな苦るしみをさせるなんて、どんな事情があるにしろ罰當りめ、御前の御父さんもかあちやんも惡いんだ。私は小供があるからこんな事にならなければいゝがと心配して居たがその通りだ。小

供があつては喧嘩は出來ない。泣くぢやない、仙坊、こんな鬼見たような親をもつたのが御前の不運だ。泣くぢやない、泣くぢやない。

さわ。仙ちやんもう泣くんではないの。皆んな居るから大丈夫なの。

老婆。小供の方で親を心配してゐるのですからね、親の方では構はないのに。小供があつては、喧嘩は出來ません。小供の前ではよしやどんな事があつても差控へなくては、小供が可愛相です。それをまあ、死んだかと思はせる程心配させるなんてひどい事だ。これで泣き止みます。向ふへ寢かへして遣りましよう。あゝすつかり疲れてしまつてヒク〳〵してゐます。餘りかつも强情すぎます。

さわ。向ふの室へ寢かせるのですか。

老婆。ときもこつちへ來ておいで。

さわ。布團がなくては困りましよう。

老婆。ありがとうございます。

（さわと老婆と布團を隣室へ運ぶ。）

さわ。御かみさんをこうしてをいては寒いでせう、布團をかけますか。

かつ。（起き上る）すみませんです。奥さんどうか私はこのまゝにしてをいで下さいまし。

さわ。御休みになつた方がよくはありませんの、起きてゐらつしやつてはよくあ

りません。

かつ。有難うございます。いゝのです。私はいゝのです。

さわ。然うなさい。

かつ。いゝえ、かまいません。私は平氣です。（さわに禮をする。）奥さん、とんだ所を御目にかけてすみません。

さわ。いゝえちつとも私に御遠慮はありませんわ。そんな事私何とも思ひはいたしません。私達は始終御かみさんがいゝ方だと御噂してゐない日はないのです。只小供さんが御可愛い相です。

かつ。そうなのです、小供は可愛相です。御世話になりましたらう。私はつい強情張つてかまいもいたしませんでした。惡かつたのです。仙坊は寢ましたのですか。

さわ。えゝ今御ばあさんがあつちで寢かしていらつしやいます。

かつ。ひどい親だと思つてゐるでしよう。

さわ。そんな事思つてやしませんでせう。

かつ。よく出て來ないでゐますね、私の聲がきこえるでせうに。

さわ。もう寢付いてゐるのでしよう。

かつ。そうですか。寢付きましたか。可愛相に苦るしかつたでせう。私は小供によばれる度びに夢中で何が何だかわからずにゐましたが、耻づかしい氣がしました。

抱いて遣り度かつたのをしなかつたからです。小供に耻づかしく思ふのですから一番惡い事なのです。あんな事をするのは、餘り强情なので奥さんも愛惜がおつきになりましたらう。馬鹿です。私は、あゝ

さわ。おかみさん、苦るしいのですか。

かつ。えゝ、もう大丈夫です。惡い事は出來ません。すぐ罰が當ります。（泣き出す。）小供にだけは苦勞され度くなへと思つてゐるのにこれですから、私達の小供になつた子は可愛相です。私をひいきにしてくれるのです。

さわ。矢張り心配なさつてかばふのですわ。自分に親切にしてくれる人はよく知つてゐるのだ相ですね。

かつ。（眞造に）そこでそんなに下計り向いてゐないで奥さんに皆んな白狀してしまふがいゝ。弱蟲の癖に惡い事をするのだ。私を恐がつてゐなくてもいゝよ。

眞造。實はね。奥さん。あれがあんなにして居ますのも皆んな私が惡いのです。私に婦人との關係がありまして、私はその女とは切れ樣と思つてゐるのですが、種々事情があつて今迄そのまゝになつて居たのです。

かつ。奥さんをだましてはいけないよ。私の前で嘘はつかさせないよ。その事情と云ふのを御話しするがいゝ。

眞造。默つてゐてくれ。俺の云ひ度い事だけ云はしてくれ。實は小供が出來たりし

てゐるのです。

かつ。（ヒステリックに笑ふ）小供ばかりあつちこつちにつくる事は上手だ。食べさせる事も出來無い癖に。私にもあとが出來るのですよ。

眞造。夫婦は仕方がない。

かつ。家の子も養へないのに他の女に小供をつくる人がありますか、奥さん、小供が出來たなんて嘘なのでございます。自分で嘘を云つてゐるか女が嘘をついてゐるのです。だまされてゐるのです。先にもそんな事があつたのです。御信じになつてはいけません。

眞造。今度は本當なのだ。

かつ。本當ならば家へ連れて來たらいゝでせう。私は大事にして遣るから。三疊へ來てゐるといゝ。

眞造。そんな事が出來るものか。奥さん、私は二三日前でしたかこれの出て居ます工場の主人から、買物を頼れて金を十圓渡されたのです。それを私が使つてしまつたのです。工場の主人とは古い頃からの知り合ひですから示談にして下さる樣に詫び入る積りですが、それで今夜も私はその話をつけて安心させ度いと思つてかへつて來たのです。私も今度はとうていこつちでは働く道がありませんから大阪の方へ行こうと思つてゐるのです。その相談もしようと思つてかへつ

て來たのです。そうすると無理はないのですが、私に仙坊を連れて今夜すぐ出て行けと云ふのです。私も今迄づうと難儀をかけてゐましたので、今かつと別れる氣なんかまるでありません。如何かしてこれから少し安心させて遣り度いと思つてゐます。

さわ。そうなればおかみさんもどんなに嬉しいか知れませんわ。

かつ。嘘です、嘘です。そんならどうして私をころばして抑へつけたりしたそんな氣ならあんな事は出來ない。

眞造。話をしようと思つて居るのにまるで話をさせないで暴れるから抑へつけて話そうと思つたのだ。

かつ。御前さんはそんな事が私に向つて出來る人か。弱い者いぢめ、私や小供や御ばあさんばかりいぢめてゐるではないか。それで威張つてゐられる人とは譯がちがふのですよ。そう云ふ人はちやんと妻子を養つてゐる人の事ですよ。御前さんは人に迷惑をかけるより外何もしてゐないではないか。私ばかりではない、且那にだつて相だ。御父さんにだつてさうだ。腦の惡い御父さんが家にゐられないであの軀で無理にも出稼ぎに行つて居るのは御前さんと家に一所にゐたく無い計りだよ。御父さんは自分が遊んでゐてはいゝ氣になるだらうから、死んでもいゝから、自分で働いて食べて行くつてとめるのもきかずに出て行つた。皆んな

そうして居るのだ。ね奥さん何處の人だつて皆んな遊んでやしませんね、自分で呑氣にして居る人はありはしませんね。何か働いて居る。人の爲めかでなければ人に迷惑をかけない爲めに自分で働いて居る。御前さんはそう云ふ人が馬鹿に見へるだらうね。人を苦るしめても自分がよければいゝと思つてゐるのだ。ちつともよくはありはしない、一番惡い事だ。私はいくら貧乏しても惡い事はし度くない、貧乏だからつて惡い事は出來ない、貧乏は苦にならないが惡い事するのは一番苦だ。御前さんから見るとそう云ふ人は馬鹿なのだ。只ずるいのだ。そんな我儘がどうして通るものか。だが私だつてこれでは働く氣力もなくなる。仙坊やおばあさんやときがゐるから私も慰められて氣力も出るけど、本當につまらないと思ふ時がある。そんな時には仙坊やときの事を考へる。そうして又働く氣にもなれるけど、これで皆んな居なくて自分一人なら私はきつと死んでしまつて居る。皆んな御前さんがそう云ふ氣にさせるのだ。私がこう云つても情談でも云つて居ると思つて聞いて居るのだらう。こう云ふ苦るしみも御前さんには笑つてゐられるのだから。

眞造。俺だつて自分が惡い事をしてゐるとは思つてゐる。私はよく家へかへつて來ても口もきかないでこゝにこうして座つてゐる時があります。始終です。その時にはまつたく私は考へてしまふのです。俺だつて決してこんな暮しを御前達

にさせてをいて平氣でゐられるものかどうかしてもつと樂にさせてやり度いと始終思つてゐる。だが駄目なのだ。然し大阪へ行つたら俺は本當に眞面目に働くよ、今迄の事は大目に見てくれ。御前にすまないとは始終俺だつて思つてゐる。

かつ。大阪へ行くなんて、奥さんに嘘はつくまいね。

眞造。あゝ嘘なものか。（さわに云ふ樣に）大阪には友達が居るのです。その友達の所へ行く積りです。此間も來いと云つて手紙をくれましたから、行きさへすればいゝのです。

さわ。あちらで何か商賣をなさるのですか。

眞造。その友達はメリヤスシャツの工場をやつてゐるのです。その方へは私は向かないのですが、そこへ行つて落着いて口を探すつもりなのです。何だつてやれます。

かつ。いつ行く積りだ。

眞造。四五日内に行く。（さわに）そうすれば少しは家に仕送りも出來る樣にします。

かつ。汽車賃はどうするの。

眞造。汽車賃は今無いけどつくる氣だ。

かつ。どこでつくるのです。

眞造。大阪へ賴んでやれば送つてくれるのだ。

かつ。行く時に停車場まで私が行つて見るよ。
眞造。いゝとも。
かつ。切符を買ふ所からちやんと乘り込むまで見屆けるよ。
眞造。疑ふなら氣の休まるようにするといゝ。如何とも。
かつ。私達を捨てゝ行く積りなのだらう。
眞造。そんな事あるものか。
かつ。一人で行くのではないだらう。
眞造。一人さ。
かつ。あの女と行く積りだらう。
眞造。汽車へ乘る所を見屆けたらいゝではないか。
かつ。西田に智惠をつけられたのではなからうね。
眞造。あいつは何にも知らないのだ。俺も話さないのだ。今度は知らさずに行く。今迄だつて俺があの女の處へ行くのは、西田があすこに世話になつてゐるので俺が行つてやらないと追ひ出されてしまふから、俺に頼むから行つてやつたのだ。だがもうそんな事はして居られ無い。
かつ。よく一人でそんな事思ひついたね。
眞造。俺が一人では考へられないと云ふのか。

かつ。御前さんの脊後(うしろ)にはいつでも誰かしら附いてゐるのだから信用出來ない。本當に嘘計り平氣で云へるから安心出來ないのです。
さわ。そんな事はなさらないでせう。
眞造。そつちで餘り心配してるから何でも嘘だと思ふのだよ。嘘つくものか、本當にそう思つてゐるのだ。
かつ。いつまでつゞくものか、たとへ自分でそう思つても此人は駄目なのです。慮病で嘘つきで、嘘をついても惡い事をして居るとも思つてゐないのです。惡いと思つても嘘をつくのです。いゝ事のようにして嘘をつくのです。只ずるいのです。意氣地なしなのです。西田の所へ行つて遣らないと追ひ出されるからなんて嘘です。あんな言ひ譯をするのです。みす〳〵嘘とわかるのにするのです。人をごまかすのです。私はごまかされませんよ。私はすつかり知つてゐますからね。自分でもそれはわかるのです。きつと困つてゐるのです。私は用心してゐるからね。奥さんまでだます氣だね。御覽なさい、奥さん、下を向いてゐるでせう。あれが手なのです。をとなし振つてゐるのです。どうかして奥さんに自分を善い人に思はれようと考へてゐるのです。ずるいのですからね。人をごまかさないと安心出來ないのです私が何を云つても默つてゐるでせう。あれは口がきけないのです。私が何でも知つてゐるから嘘をつけないので恐いのです。だが奥さんにはうまく嘘をつ

こうと考へてゐるのです。それ〳〵上目を使つたでせう。皆んなの顔色をあゝして見るのです。そうして隙があつたらごまかさうと思つてゐるのです。笑つてゐます。笑つてゐても泣き度いような氣持なのです。

老婆。（隣室から出て來る）かつ、いゝかげんにしてをかないか。奥さんが御困りになるよ。かつ。ね奥さん、御わかりでせう。私はよく知つてゐるのです。ごまかされはしませんん。奥さんも用心なさつて下さい。

老婆。止めたらいゝに。氣違ひ見たようだ。のぼせてゐるのだ。

かつ。奥様をだましてはすまない。奥様は御親切に云つて下さるのですが、私はどうしても信じません。私はこの人の腹がわかつて居るのですから、確りした證據を見せてくれなくてはとても安心出來ません。

老婆。（獨言のように）自分の亭主をつかまえて嘘だの、だますだの、證據だのと云ふものではない。何と云ふ頑固な女か。こうなつてはどつちがいゝのかわかりはしませんですよ。御互に苦るしめ合つてゐるのですね。これが罰なのです。奥さんももう遲うございますから御歸り下さい。こゝにゐらつしやつては御氣の毒です。見てゐるのは居辛うございます（次の會話中に隣室に行く。）

さわ。私は平氣なのです。只おかみさんが御氣の毒です。どうかして氣を休めてあげ度く思ひます。女が一人ぼつちにされてをかれる位淋しい悲しい事はありま

せんもの、それにおかみさんは正直な心をもつてゐらつしやるから尙御辛いのです。餘り正直なのです。曲つた事が御嫌ひなのです。どんなにあなたを愛してゐらつしやるかわからないのです。（眞造に云ふ）いくら女が盡してもそれを見て下さる方がなかつたらつまりませんわ。男の方は始終愛が足りない〳〵と思つてゐらつしやるのでしよう。それは無理ですわ、愛されてゐる事が御わかりにならなければ御自分でも愛せませんものね。おかみさんは眞面目ないゝ方ですわ。外の女が何です、そんな女私嫌ひです。あなたがそんな女に關係して居らつしやるのはあなたの恥ぢですわ。こんないゝ御かみさんを苦るしめては餘りですわ。あなたに目がないとしか思はれませんわ。御損ですわ眞面目ないゝ方ですわ。本當に。あなたもいゝ方なのですのに惜しいと思ひますわ。家でもあなたをいつもいゝ方だと御噂してゐますの、あなたと御友達になつてもいゝと云つてゐますわ。

眞造。私と友達になつて下さるつて、本當ですか（泣く）そんなに皆さんが思つて下さるのですか。あゝ私も氣持のいゝ日が送り度いのです。こんな厭な思ひはし度くはありません。氣が樂になり度くも思ひます。始終です。始終そう思つてゐるのです。（身を顫はせる）奥様と御前の前で俺は嘘は云はないよ、俺はあの女はとうに厭になつているのだ。それは本當だ。西田も俺は嫌ひになつているのだ。あいつと私を合棒の様に思つて貰ひ度くはない。俺は綺麗な事が好きなのだ。こう云ふと俺

ばかりいゝ人間のように思はせる樣だが、それはどうでもいゝ。俺だつてよくはないのだから人はどうでもいゝ。只俺は心からあいつ等は嫌ひになつて居る。蟲が好かないのだ。俺は島さんのような人が好きだ。俺見たようなものが島さんの側へはよりつけない。人間がちがふ。だが俺はあゝ云ふ方が好きなのだ。俺は今はつきりそれがわかつたのだ。ずい分俺も卑しい眞似をやつたけど俺は心から卑しくはなれない、西田なんかあれは心から卑しいや。奥さん、私は生れ變りますよ。私は島さんから本を拜借してよみ度いと思ひます。借して下さるでしようか。

かつ。もう御友達になつた氣です。

さわ。喜んで御借ししますわ。

眞造。本なんかいつ讀んだのかもうわからなくなつてゐます。何か爲めになる本はありませんかしら、そんな本は澤山あるでせうが、奥さんが御よみになつたのでよござんす。

かつ。いゝ氣になつているのです。奥さん。

さわ。ユーゴーと云ふ方の哀史と云ふのを御讀みなさいませんか、私此間よんでずい分泣きましたの。

眞造。悲しい事がかいてあるのですか、借してやつて下さい。明日から家でよみます。こんな家の中で本をよむのは可笑しくありませんか。

かつ。家の中より御前さんが本をよむ方が餘程可笑しいよ。そんな大切な本を拜借して汚しでもすると惡い。

眞造。叮嚀に見るよ。讀んだら棚へ上げてをくよ。私はもう家から一歩も出ません、大阪へ行く間、謹愼します。

さわ。あなたもそうしてゐらつしやれば安心ですわね。

かつ。えゝ。それもつゞいてくれゝばですけれど。（夫を見る）

幕（つゞく）

一九一六、五、一五、夜

犬の子

（小品）

母は弟の家の引越しの手傳ひに行つて留守であつた。もう一人の母は妹達と臺所で弟の家へ送るおすしをつくつて居た。自分は話相手も無いので、妹の室から借して置いた、聖フランシスの小さい花をもつて來て臺所の隣室で讀んで居た。丁度開いたところは、フランシスが人や獸に害をなす狼を悔改めさせた奇蹟の所であつた自分はそれをよみ乍らその不思議な狼がまるで人間の樣に思つた。然し自分は變に氣が落着かないので――いつも家へ行くと氣の落着いたためしが無いのであるが――自分でもそれを意識して抑へ付け〳〵して居た。然うして自分は何か心から得たいとぢつとして本を見たり考へたりしてゐた。其時自分は小犬の啼聲を耳にした。自分ははつとして耳を立てた。それは痛々しげに甘へる樣なかすかな聲で斷續して消へた。自分はその瞬間に『何處で啼いて居るのだらう』『一匹か二匹かしら』『捨てられた未だ幼いのかしら』『見に行つて見ようかしら』等と思つたが聲が止んだので、もう一度啼いたら出て見ようと思ひ乍ら本を見て居た。その內聲はもう聞へなくなつた。自分は耳の故だつたと思うた。小犬が居る筈は無い

と思つた。然うして自分は安心した樣に又本の方へ氣をとられて居た。然し時々小犬の事が氣になつた。

一年許り前から家へ紛れ込んでゐる牡犬が近頃はらんで大きな腹をしてゐたので自分は前からそれを氣にして居た。小供が生れゝばどうせ捨てられるのだ。そんな事はもう二度か三度有つたのでその犬が大きな腹になつてから家へ來ても成る可く犬の話を自分からする事は止め、人からも聞き度くないと思つてゐた。自分は若し誰かが『犬が又小供を生みますよ』とでも云はれたらどうしようかしらと心を使つてゐた。其內或日家へ行くと、其の牡犬が私の歸りをもう一匹の犬（これは家で飼つて居る）と途中まで送つて來た。其時には牡犬はもう產をしてしまつたらしく普通の姿になつて居た。喜び勇んで私の周圍をとび廻る（この犬は人に手をふれさせないで只狂氣のようにとび廻るのだ）のを見て可愛相に思つた。自分は途中から二匹を追ひかへして一人別れて來て電車を待つてゐる間も、生れて捨てられかどうかしてしまつた小供とその親である牡犬の事を考へると、涙がこみ上げて來るのでそれを紛らす爲めにそこらを歩き廻つたりした。そうして心の內で祈つたりした。家へかへると妻がよくその安否をたづねた。その時にも自分は苦るしい氣がして『捨てちやつたのだらう』と云つてゐた。

こんな事があるので自分は今の小犬の啼聲がしても未だ捨てられないである

とは思ひもつかなかつた。そうして矢張り幻聽が氣の故だと思つて打消した。

暫らくして自分は本にも飽きた。そうして歸る挨拶に臺所へ出た。そこで母から金を少し貰つて二言三言話して居ると、臺所の隅の方の上板をあげて妹が二人(十八と十四になる)しやがんで中を覗き乍ら何か饒舌つて居た。それでも自分は未だ小犬が居るとは思はなかつた。然うして母と會話をつゞけて居た。會話が途切れた時妹の方へ向いて『何をしてゐるの』と聞いた。二人の妹は下を向いたまゝ同時に『小犬がゐるのよ』と夢中で云つた。

自分は「えゝ」と驚きの聲を發した。そうしてすぐ行つて見た。濕つぽい黴臭い匂ひと冷たい空氣が鼻をついた。

『どれ〳〵幾匹ゐるのだ』

『四匹よ。あれは憎らしい顏して居るのよ。あつちのが可愛いゝんだけれど、それは可愛いゝのよ』と十四になる妹は早口に云つた。もう一人の妹は「へつへつ」と笑ひ乍ら、何かちぎつて投げ入れた。黑と褐色の小犬が腐つた箒や板片れのちらかつて居る狹い日の當らない濕つた土の上を暗い處から出て來ては動き廻つて、又暗い方へ引込んで行つた。

『出て御いでよ、まあ憎いのね、こればかり出て來るのだもの』と妹はその憎らしい顏をした褐色の奴ばかり動き廻るのでこう云つて笑つた。

『よく飼つて置いたのですね』と自分は思ひついて母をふりかへつて云つた。

母は平氣で何か爲ながら『どうせ今に小供がもらいに來ますわな』と云つた。

自分はよかつたと思つた。母が小供と云つたのは小學校に行つてゐる弟達の友達なので、少し頼りない氣がしたが、自分は又すぐ中を覗き込んで。

『もうこの位育つて居れば大丈夫だ』と云つた例へ捨てられても自分で食つてゆく力もあり又拾はれもするだらうと思つたので。

『えゝもう大丈夫だわ』

と妹が太い聲で云つた。

『何をやつてゐるのだ』

『をせんべいよ』

『食べるかい』

『食べてよ』

等と呑氣な會話をした。妹はさつきから可愛いゝ犬を呼び出そうと骨折つてゐたが、やつぱり外のは出て來ないで褐色の奴ばかり出て來て嗅ぎ動いた。

『厭だわ、あれブルドックのような顏をしてゐるわ』と妹は叫んだ。本當にそれはブルドックのように口でも眼でも二重にあるようにその上に皮が厚く刻んだように高くなつてゐる奴だつた。その中に暗い處から牡犬が餘り騷ぎがひどいので

その親らしい顔を突き出して眼を光らした。その眼には人を頼る樣な心配相な何とも云へぬかげがあつた。自分も涙ぐんで「よかつたね」と云ふように見て遣つた。

『もう御しめなさい、臭くてたまらないから』と誰か云つた。

自分はそこをはなれて母を見た。母は矢張り平氣らしく何か爲てゐた。妹達も女中も皆平氣らしく仕事をしてゐる。自分は變な心の錯誤を感じて頭がボンやりした。何だか御禮を云ひ度い氣がした。然しそれは可笑しいと思つて止めた。けれども今日まで自分が小犬の話をされるのを恐れたり、それを聞かされると厭でも氣を苛立てると思つて觸れまい〳〵と用心して、今にもそれを云ひ出されはしまいかと思つてはら〳〵してゐた事や、心をごまかしてゐた事や、もう捨てゝしまつたのだらうと疑つてゐた事等がすべて取越苦勞であつた事を思つて、自分は人々特に誰をさすのではないが、母初め家の者達に向つて、漠然とした疑ひと憎みとあきらめから生じた淋しさを感じてゐたのを今一掃されて心の輕くなるのを覺へ、そうして又その人々がその小犬を飼つてをいた事をとり立てゝ何とも思はず平氣でゐるのを見て、自分は一種の錯誤を感じて必が動いた。そうして自分は。

『自分の思ふ通りに人をするのはよくない事だ。それと同じく自分の思ふ通りに人を思ふ事も惡い事であつたと思つた。そうして心が高められ明らくされるのを喜びを以て感じた。そうして自分は自分が今迄思てゐた心配を話して母に御禮を

それとなく云はうと思ふ衝働を感じたが、それも止めた。自分はその嬉しさを隱して皆んなと同じ樣に平氣な顔をした。然しそいで歸る事は止めにして、すゝめられたので晝飯の御馳走になつて歸る事にした。終り。

女乞食と犬の話

（小品）

私はいそいで居た。家から警察まで血眼になつてかけて行つた。私の犬が二三日前から見へなくなつたのである。

『もう遲いかもしれない。何故一昨日か昨日家へ來なかつたらう』私は後悔したり心配したりした。私はカッ〳〵と熱かつた。憎惡に滿ちてゐた。警察を憎んだのである。

私は犬の殺される所を想像したり、犬が外の見知らぬ多くの犬の中に入つてゐて助けてくれるものと思つて私の來るのをさぞ待つてゐた事だらうと思つたりするときり〳〵心が痛みを覺へた。私はどうしても救はなければならぬと決心すらした。犬の哀願する心をぴたと感じた。

私は警察の側までかけて行つた。で警察の黑い塀が見へると私はやゝ步調をゆるめて先づ呼吸をしづめ十分心を落着けて行こうと思つた。私は立止つて氣をしづめたのである。すると私はそこまで來たのが馬鹿々々しいような氣がし初めた。見ると私の立止つた前に船から荷を揚げる空地があつて、その空地の隅に人がたかつてゐる。私は近寄つた。

女乞食が七八人の少年を前にして何か饒舌つてゐるのであつた。私は立止つて見た。凡ての人はその女乞食から一間位の間隔をへだてゝ立つてゐた。それは餘り側へよると惡い匂ひが移るように思つたので自然へだつてゐたのである。女乞食はそんな事に氣がつかないから人をいやがらせないで側へ寄らうとはしなかつた。初めから終ひまで同じ位置を動かなかつた。

初め私は何か悲慘な事でも見るのだらうと思つて近寄つた。ところがこの一群は陽氣に笑つてゐた。私は少しびつくりしたような氣持でこの女乞食を見た。女乞食は私がその少年等の中に加ると、靜かに、しかしどつか卑しむような小さな目付で私を見た。別に目に力を入れるような事はしなかつた。

しかし乞食は人々の目をじかには見なかつた。脊の短い女であつたが、その目は人々の頭の上を越して往來の方を見てゐた。

何だか私には彼女の云つてゐる事とこの目付とは別々の事を思つてゐるように見へた。注意して見ると實際その目はいろ〳〵の心配が現はれてゐた。

然し私には女乞食が饒舌つてゐる事は何だかさつぱりわからなかつた。然しその間々には意味の通じるのもあつた。

小供達は笑つた。私もつりこまれて譯もわからずに笑つた。

一體この乞食は人好きの惡い奴ではなかつたのだ。何となく人を引つけるところがあつた。

一人の十四位の少年が

『早く行けよ。御廻りさんが來るぞ』と云つた。

女乞食はその少年をしみ〴〵光つた目に笑を含んで見た。然うして口元をひきつらして笑つた。

『巡査りかい、うむおまわりかい、うむおまわりは私をぶつよ。うんぶつともさ。』

とはげしい口調で唾を飛ばして云つてゐるかと思ふとその顏は一變した。口を硬く食ひしめ眉をつらし目を大きく睜つて見せた。額が隆起して眞赤になつた。然しこの目は相變らず不思議な光りを湛へてゐた。私はその目の中に、『ぶたれても仕方が無いのさ』と云ふ自分を嘲る色と『しかし撲つ法は無い』と云ふ憤りを見た。

然しこの憤激は長くはつゞかなかつた。然うして彼女はその少年の方へ又しみじみした目を向けて。

『うむ、この子は、親切だよ。うむ御前は親切だよ』と云つた。少年は『馬鹿にしてゐやがらあ』と苦笑して、くるりと身軀をまわして、そこらを歩いた。しかしすぐ運動を止めて又心配相に女乞食を見てゐた。

私は十分位立つてゐた。犬の事は心からはなれてゐた。

私も早く去つたらいゝだらうと思つた。

少年は皆んなで『早く御行きよ』とすゝめて居た。彼女は何だかそこを去るのが惜しいような風であつた。何かにひきつけられた樣に。

その内先刻の少年が、手に硝子で出來た石蹴り玉をもつてゐたのを女乞食は目を輝して見た。

『うむ未だもつてゐるね』そう云つて又しみ〴〵した光りを目に湛へた。彼女はこの少年と計り話しをした。

彼女は饒舌つてゐる間はいろ〳〵の人を相手にするようにした。しかし誰も不氣味なので相手になるものはなかつた。只笑つてゐた。この少年のみ彼女を相手にしたのだ。

私は彼女が少年のもつてゐる硝子玉をよほど珍らしく見てゐる事を發見した。

女乞食は少年にその玉を大切にしまつてをけと云ふように小供がそれを見へるように持つてゐると隱せ〳〵と云ふように見へた。少年がそれを手の中に握りしめてしまふと彼女は初めて安心したように笑つて皆なを見廻した。

『私もそんな玉をもつてゐた事があつた』と彼女は眞面目な顏になつた。私は何を云ひ出すのかなと思つた。彼女はその時にまつたく聲調を變へた。

『然し私はそれをとられた』と彼女は云つた。少年達は笑つた。しかしそのとられたと云ふ言葉には本當にしみ〴〵した無念さがこもつてゐたのが不思議に感じられた。

笑ひはすぐ止んだ。そのあとを聞きたかつたのである。

『或時御宮に私は眠てゐた。すると夜中に二人の男の野郎が來て私をおどかしてもつて行つた。』

此の女の内から出る言葉は凡て不思議の世界から來るものゝように聞へた。簡單なつまらぬ言葉も私達を引きつけ然うしてこれから何を云ひ出すだらうと云ふ期待を抱かした。人々は笑つたり眞面目になつたりした。然し彼女は尙多く語る事をもつてゐるのだが、それを云ふのは惡いが或は云つても初まらないとでも思つたのか、それきり語らないで『その玉はそう云ふ玉であつた』と云つてその話は止めた。

然し私はこの間に彼女の心使ひが十分わかつたような氣もし何にもわからなかつたようにも思つた。何も意志はなかつたのかもしれない。

私はその玉を慾しがつてゐるのではないかと思つた。いかにもその風はそうらしかつた。然しそうでもないようでもあつた。

この間少年達は彼女に幾度も去れ〳〵とすゝめた。彼女も今にも出かけ相な風

をしたしかしすぐ言葉が彼女を引とめた。何か又話し出すのである。話したくつてたまらないと云ふ風にそれは餘程不思議であつた。何でも私達にはわからない事を知つてゐる人のようにすら見へた。

私はとう〳〵謎を解き得ずにそこを離れた。

警察へ行くと。犬殺しを昨日やつたから或はその内に捕へられてあつたかもしれない、犬は此處にはゐない。捕へるとすぐ千住へもつてゆくのである。そこへ行くなら教へようと云つた。私は默つてそこを出た。犬はその箱から出される時一匹づつ首締られるのだと私は聞いて居た。行つた所で駄目だ。

河岸にはもう女乞食も少年もゐなかつた。

私は家まで默つてかへつた。家が近くなると馳け出して飛び込んだ。

母が出て來て。『どうして』と聞いた。

私はその頭をひたと見た。母も私の顔をひたと見た。

『殺れた』そう云ふと私は胸が急にぐつとこみ上げて『あゝ泣くのだな』と思ふと涙が流れ出しもう口はきけなかつた。母は去つた。

私は立つてゐられないので座つた。然うして泣いた。庭を見て。そこには日が當つてゐた。私ははつきり大地を見た。こまかい木の枝の皮や塵までもはつきりと。私はポンやりした。

そこへ八歳になる弟がやつて來た。彼は私の頭を見ると出し抜けにギクッとふるへた。その小さな顔に力がこもつて隆起した。然しそれがすぐ消へた。私はその目に涙を見た。私は胸が詰つた。その愛情が現はれて消へる間には慥かに小供のこらへようとする意志が働いたのを感じた。弟は首を垂れた。然うしてしほ〳〵した聲で『警察は惡い奴だ』と云つた。私はこんな言葉を聞いたのは初めてゞあつた。

（十二月二十二日朝）

或る斷片

（感想）

A。御前は何を考へてゐる。

B。俺は淋しいのだ。

A。今更らそんな事を云つても初まらない。

B。云つても初まらない事かも知れない。然し俺は淋しい。如何うとかしなくてはゐられない。少し考へるとぢつとしてゐられなくなる。自然は恐ろしい。考へると氣が狂ひ相になる。涙がにじみ出して來る。こんな事はしてゐられないと思ふ。氣があせつて來る。人々と力づけ慰め合はなければならないと思ふ。早くそれをしないと此世が終つてしまふ氣がする。善い事がし度くなる。善い事は早くしなければならないと思ふ。思ひ立つた時しないとしぼんでしまふ氣がする。和解するなら早く和解し度い。愛し合ふなら早く愛し合ひ度い。謝る可き事は早く謝り度い。淋しさを與へてゐたら早くとりかいし度い。その上、淋しさも與へ度くない。自分に惡い意志も抱かせ度くない。自分はとりかへせない事もしてゐる性か、何でもとりかへせるものだけはとりかへし度い。無論その上にもし度い事はどんど

んし度い。何でもごまかしてをくのが一番不可ない。一番淋しい。他人をごまかしてをけば他人は淋しいだらう。自分をごまかしてをけば自分は淋しい。他人の心に觸れ度い、他人の心に觸れられないのは淋しい。萬人の心に觸れ度い。それをする勇氣がなかつたら此世は淋しい。力づけ助け合ひ度い。他人の不幸を見るのは淋しい。他人の不幸を慰めたい、その人達の心に觸れて觸れぬき度い。他人の心は自分に頼つてゐる氣がする。皆んな頼り合つてゐる氣がする。心と云ふものは自分以外のものゝ爲めにつくられてゐる氣がする。それを開かず抑へつけてしまふのは惡い事だ。それでは淋しい。その心に從ひ切り度い。その心を生かし切り度い。とりかへしがつかない事はし度くない。とりかへしがつかない事をしたらとりかへしをつけ度い。その儘にほつては置け無い。そのまゝにほつてをいたら死ぬようなものだ。俺は死にたくはない。無意味は罪だ。心を生かして生かしぬき度い。どんな苦るしさも忍び通し度い。忍び通せばきつと世界は開けて來る氣がする。餘裕なく心を生かせば許される氣がする。それが何年つゞくかはわから無い。然し俺は忍び通す。そうして生かされる。救はれると云ふ事は俺にとつては生かされる事だ。この意志は失ひ度くない。この意志がなかつたら淋しい。餘りに恐ろしい。何もなかつたらこの位たまらない事はない。希望は失はない。希望は小さいところから開ける。死以上の希望を生かし度い。それをつかみ度い。その希望は心

にある。心を生かすよりない。心が死ねば希望も死ぬ。心が枯れない限り俺は死なない。萬難を忍び通して心を生かす。この心は淋しいものであらう。然しその心が大事だ。その心がなくては俺は死んだ方がいゝのだ。本當の事にふれる心は恐ろしい。然しふれないのは淋しい。心無しではたまらない。自分の周圍の事を思つてもわからない事は多い。生きる事に餘裕はない。何でも大事な事計りだ。それを知る心が尊い。それを知つては死なれない。死以上にその心を生かさなくてはならない。その心を失ふ事は自分を失ふ事だ。俺はその心をよく見失ふ。然しすぐ見出す。永久にその心を見失つたら何と云ふ損失だらう。恐ろしい事だ。生れ甲斐のない事だ。

A。御前は何か氣になる事があるか。

B。氣になる事はありすぎる程ある。自分の周圍だけでも大變だ。父や母やも幸福にし度い。死と云ふ事を考へると何もわからなくなる。今の内慰めてをかなければ死んでからはどうともならないと思ふ。死んでしまつてから氣がついても遲い。それはとりかへしのつかない悔恨になつてしまう。それは恐ろしい。愛す可き者を愛さなかつた悔恨位淋しい遺る瀨ないものはない。殺氣立つて來る程息苦るしい。人間は本當に悲壯だ。別離と云ふ事實は餘りわかり切つてゐるだけ恐ろしい事だ。餘りに淋しい絶望的な事實だ。「もう御別れか」と云ふ時が一度は來るの

だ。たまらない事だ。それで如何うにもならないのだ。ぱつきりこつちの力以上の事なのだから。どんなに氣があつてもあつてからは何にもならない。自分が死んでも人が死んでも同じことだ。絶へず遲く氣がつく事は恐ろしい。そう云ふ悔恨はたまら無い。心がなければそう云ふ悔恨は絶へず犯さなくてはならない。氣がつかなくてはならない事に氣がつかずにゐるのは恐ろしい、厭だ。氣がついたら何かし度い。氣がついても默つてゐる時はある。惡い事に氣がついたら默つてゐる方がいゝ。然し爲なければならない事に氣がついて默つてゐるのは臆病だ。俺は臆病だ。卑怯だ。然し俺はそんな事も云つてはゐられない。俺は自由に恐るゝ事なくそれを爲なければならない。餘りに氣のつく人間は卑怯者にも見られ易い。彼等には本當の事はわからないのだ。本當の事は生きてゐる。きつとそれは萬人の心に浸み込む。誰かの心に浸み込む。ゴオホは自然に忠實ならばいつかきつと反響を見出すと云つてゐる。自然は見られない易い誤られ易い。一番誤られなくていゝ事が一番誤解され易い。多くの人が自然を見ないからだ。自然を見る勇氣がないからだ。彼は生きてゐるものを侮蔑する。生きて働く心を嫌ふ。然しその心より愛す可きものはない。その心より貴いものはない。そう云ふ心をもつた人が天才だ。自分の心にふたをしなければ氣がすまぬ奴はろくな人間にはなれぬ。心と心は生きてゐる。それは見へぬ所でふれ合つてゐる。それ

を直接見る事が出來なくては淋しい。それをそのまゝ見る事は淋しい。人間は誰でも心と心で生きてゐるのだ。その心の持ち主はちがつてもその心の大小深淺高貴、卑賤の差はあつても。どこかにその自然な心の現はれてゐない人間は先づ無い。それが尊いのだ。

俺は此頃父の事をよく考へる。父の事を思ふと俺はたまらなく淋しいどうかして父を慰め力づけ度い。餘りに俺は父を淋しくして來たから。父に安心を與へ度い。その上父に勇氣づけてあげ度い。父の希望を聞いても上げたい。父の意志をうけついでも上げ度い。パムレットが父の意志を果したように、俺も父から聞く可き事があつたら聞いて上げ度い。パムレットのような役目は御免だが、俺がそれを受けついで聞いて上げなくては外に人はない氣がする。俺は何か父にはある氣がする。俺は又父にもつと我儘をしてもらい度い。何だか俺は父が遠慮してゐる氣がする。父らしい權利をふりまわしてほしい氣もする。父の遠慮してゐるのを見るのはたまらなく淋しい。俺は父をずい分をびやかした氣がする。俺が妻と結婚していゝかと父に聞いた時父の手のふるへたのを俺は忘られない。きつと父の心もふるへてゐたと思ふ。俺はそれを思ふと胸がどきつとする。それ計りではない。俺は子供としてほとんど手のつけられぬ程、我儘をふるまい、虫がよく生き通した。父はいつも遠慮して避けて下さつた。父の意志が通つた事は俺には

ほとんど無い。いつも俺が勝つた。俺はもう此上自分の意志を通したくない。むしろ父の意志を通さして上げ度い。遠慮なく自分を叱つて慾しい。父は餘りにきびしくなさ過ぎる。父は餘りに小供の運命を心配しすぎる。餘りに消極的すぎるからいけないのだ。母はよく父が餘り心配しすぎると云つてゐたのが自分にはどうしてかわからなかつた。然しそれは本當だ。それを思ふと涙がこぼれる。それがわからなかつたのは俺がとりかへしがつかないと思ふことの一つだ。一家の内で自分位我儘に意志を通したものはない。自分はそれを思ふと少し恐ろしくなる。自分はそれによつて家族の愛を失ふような事はないが、一時はその愛が感じられなくなつて如何うしようかと思つた。餘りに專横を働いた氣がして自分は今あせる。自分はとりかへしがつかない事はし度くない。それは恐ろしい自分に要求されてゐる愛はどうしても果たさなくてはならない。それだけでも果たし度い。自分の内の愛を殺す事が一番深い罪だと云ふ言葉がボルクマンの内にあつたが本當だと思ふ。それより無いのだ。愛を果たすより無いのだ。俺はあせる。俺はあせる。俺は何かにならなくてはならない。だとへ俺の周圍の者が此世以上の事を知らないで亡びても俺は最後まで生き度い。そうして何かし度い。俺は生きてゐると云ふことで何かし度い。死んでしまつては何も出來ない。よしすべて無意味でも俺は俺の心にかじりつきそれ以上に心を生かしたい。凡人以上の心を

もつ者は責任かある。現世は淋しい。俺は現世に幸福は求め度くない。現世を淨土と思へぬ。現世にしがみついてゐる人々には愛を感じる。彼等の姿は餘りに淋しい。餘りに何も無い。俺は此間、或る墓場へ行つて見て、餘りにその數の多いのにびつくりした。世界が墓だらけの氣がした。死は至る處にあるのだなと思つた。俺はそれ等の數多い人間の死を見ても生き度い氣は一層奮ひ起るのを覺へる。死は無意味だ。その事實を知つたら生きる事が無意味になるだらうか、生きてゆく氣がなくなるか。俺は反對に生きたくなるのが本當だと思ふ。死を讃美する氣にはどうしてもなれない。現世は苦るしい。そうして凡てが無意味かも知れぬ。然しそれ以上の事がある氣がする。あくまで執着して生きなければならないと思ふ。執着すると云ふ事は醜い事ではない。然し此世は淋しい。何も無い氣すらする。然し何かあると云ふ氣は失ひ度くない。希望をふるひ起し度い。希望にしがみつき度い。俺はいつか死ぬ。人間は無意味だと思ふかもしれぬ。もがいてゐるのが可笑しいかも知れぬ。一切が夢のようなものかも知れぬ。(何だかそんな氣がする) それでもいゝ、俺は生き度い。そうして戰ひ度い。自分の仕事の運命だつてわからない。然しその意志が燃へて來る以上俺はそれにかじりつく。死は或は吾々の意志に無關係のものではないかと思へる。何にしろ今の俺にはわからない。わからない事だらけだ。自然は大きい。自然の大を思へば勇氣は湧く。只無意味のものを意味があるよ

うには思ひ度くない。無意味はどこまで無意味でもいゝ。俺はその恐ろしい力にどんなに弄ばされてもいゝ。失望をくりかへしてもいゝ。俺は知る事の爲めに戰つてゆく。自然は淋しい。自然は恐ろしい、何でも無意味の氣がし初めたらたまらない。然し無意味の事はどん〳〵無意味になつてゆけと思ふ。いゝ加減の事にひつかゝつて安心はしてゐられない。本當の事を知らうとする謎がなかつたらたまらないかもしれぬ。その謎は人を氣違ひにさせる苦るしくさせる。それでも生きる。涙して生きる。虛無と戰ふ意志が人間そのものではないか。祈り度くなる。虛無の内から何か見へる。もの凄い。然し懷しい、人々の顔が見へる。がつかりしたような顔や目の狂るつた顔や充實したいろ〳〵の顔が見へる。悲壯なる人間よ。兄弟よと呼び度くなる。懷しい〳〵人々と呼びかけ度くなる。

（一九一六、五、二二日）

斷り

○哀れな女は三幕か四幕になると思ふ。來月は完結させる。

○哀れな女は初め友人八幡君の好意で太陽の都に載せて頂く積りで、すでに原稿も御渡しその初めを印刷所で組んであつたのを、頭の工合で非常に出すのが耻づかしくなつて止めたが、あとで讀み直して見ると或る實感はかけてゐると思つたので又發表する氣になつた。初め八幡君と約束してから三度出そうか出すまいかと迷つた。その爲めに八幡君を惱まし煩はし迷惑をかけた事は實にすまなく思つた。印刷にまで附しかけたのを止めたので今度は御願ひしにくくなつたので自分の雜誌に載せる事にした。頭の惡い時は本當に恐ろしい。

○小品は皆古く書いたものである。未だ一つ二つあるから來月號にも出すかも知れない。

○第一集に豫告しておいた脚本はその内に直して出す氣である。

白樺

（六月號）

畫家とその弟子（脚本）　長與善郎

ドストイエフスキイ（評傳）　新城和一

ベルリオツ論（ロマン・ロオラン）　尾崎喜八譯

放蕩息子（シュミットボン）　秦豐吉譯

或る青年の夢（脚本）　武者小路實篤

大造と親達（小說）　小泉鐵

挿畫――ピウヴィス・デウ・シャヴァンヌ、九枚

定價五拾錢

東京市麹町五丁目平河町

洛陽堂發行

太陽の都

(六月號)

或る心の記事　小泉鐵

一　瞥(感想)　楊田淳

優しい乙女(ドストエフスキイ)　八幡關太郎譯

六號雜記　同人

挿畫マドンナ(二枚)　ラッアエル

定價拾五錢　東京府下千駄谷八百廿六番地　太陽の都社發行

177
651

社告

寄贈書籍、編輯用事等は左記宛に

府下、巣鴨村新田、七三三

千家方

編輯所　善の生命社

交換廣告、直接購讀は

牛込區神樂町二丁目二二

發賣所　天弦堂書房

に願ひ度く候

定價(金拾五錢)

一ヶ月　三ヶ月　六ヶ月　十二ヶ月

拾五錢　四拾錢　八拾五錢　壹圓八拾錢

郵税一部　貳錢　申込ハ前金ノコト

廣告料　一等拾五圓　二等拾圓　三等五圓

大正五年五月廿八日納本

大正五年六月一日發行

第二集

編輯兼發行人　東京市外巣鴨村新田七百卅三番地　千家元麿

印刷人　東京市神田區三崎町三丁目一番地　楢山定吉

印刷所　東京市神田區三崎町三丁目一番地　友文社

東京市外巣鴨村新田七百三十三番地

編輯兼發行所　千家方　善の生命社

發賣所　東京市牛込區神樂町二丁目廿二番地　天弦堂書房

振替東京　二九五五九番

終